

## 極小未熟児の early intervention

(分担研究：ハイリスク児の地域ケアのあり方に関する研究)

分担研究者 前川 喜平 中江陽一郎 庄司 順一

### 1) Early interventionの外国における文献的考察

米国において1950年代から最初は家庭的に問題のあるリスク児、発達障害児に、その後、未熟児に対してearly interventionが行われており、膨大な文献がみられる。代表的なものとしては、Handbook of Infant Development. Osofsky 編集 第1巻、第2巻である。第1巻では障害児、ハイリスク児家庭のearly interventionが、第2巻では極小未熟児、低出生体重児のearly interventionが述べられている。Early interventionの形式としては次の方法がある。

- ① Home parent oriented early intervention
  - ② Home child oriented early intervention
  - ③ Home parent child oriented early intervention
  - ④ Center parent oriented early intervention
  - ⑤ Center child oriented early intervention
  - ⑥ Center parent child oriented early intervention
- などいろいろな方法があるが、何れも何らか

の効果があり、無駄だったというものは1つもみられない。

### 2) ハイリスク児の early intervention

現在迄に行われているハイリスク児に対するearly interventionとしては、次のものがあげられる。

#### A 既存の Intervention

- 1) 未熟児室入院中
  - ・通常のケア
- 2) フォローアップ外来
  - ・発育、発達の評価
  - ・養育指導

#### B これから必要とされる Intervention

〈必要な事例に〉

- 1) 未熟児室入院中

〈親に対して〉

- ・親子の結び付きを形成
  - …初期接触、面会
- ・情緒的サポート
  - …個別的面接

親のグループ

(self - help group)

- ・育児指導
  - …児のケアの仕方を指導
- ・児の発達促進
  - …ブラゼルトン法を demonstration

〈児に対して〉

- ・視覚／聴覚的刺激
- ・extra - handling
- ・運動刺激
- ・社会的刺激

2) 退院後

〈親に対して〉

- ・親子の結び付きの発達  
…
- ・情緒的支持  
…個別的面接、家庭訪問

親子のグループ

- ・育児相談  
…児のケアの仕方を指導
- ・児の発達促進  
…オモチャ、遊びに指導
- ・その他の生活上の問題  
…

〈児に対して〉

- ・運動発達  
…PTによる指導
- ・言語、社会性の発達  
…心理、STによる指導

### 3) 極小未熟児の early intervention (案)

文献的考察と early intervention の結果を考慮して、我国における極小未熟児の early intervention の方法として次の案を作成した。

#### 目 的

Early intervention は脳障害を治療するものではない。この意味は脳障害を治すものではない。Early intervention の目的は、脳の可塑性を利用して最大限の機能を発揮させると母親の養育態度により本人の持っている能力が十分に発揮されていない時に本人の持っている能力を十分に発揮させ健全な社会生活を送らせることが目的である。

### Early intervention を行う理由

一見正常に見える極小未熟児において就学前にみられる神経学的行動上の問題点が軽微であり、しかも親の養育態度と関係しているものが非常に多いということと、私達が3年前より慈恵医大で行っているハイリスク児（未熟児）と正常児の医師、心理、養育環境、言語、保健婦、栄養士などの総合的アプローチの経験で、早期から介入すれば親の態度と児の行動上の問題が良い方法に変化することより、入学してから問題を起こすより、それを事前に防止する early intervention に踏み切った次第である。Early intervention を行うについてボランティア、サークル、既存の施設を利用し、なるべく費用がかからないようにした。

### 方 法

外国、ことに米国においてはかなり充実した early intervention が行われているが、我国では現状に鑑み、次に述べる方法から行うことが適当と考えられる。

対象： 極小未熟児（含む超未熟児）

条件

1. CP、MR その他発達障害の診断が既に付けられているものは除外する
2. 両親が early intervention を希望し継続して通えるもの

年齢： 修正月齢 2～4 歳

計画：

1. 2 歳時の発達検査
2. 2～4 歳 毎月 1 回 early intervention を行う
3. 3 歳時の発達検査
4. 就学時の発達検査
5. コントロールとの発達の比較

必要資料：

1. 新生児期記録
2. 2 歳迄の発達並びに小児科的記録

コントロール：

1. 同時期に出生した極小未熟児で intervention を受けていないもので、しかも2、3歳就学時に検査可能なもの
2. 同年令満期出生の正常児

実施に当たっての検討事項

1. 場所
2. 心理検査士
3. 発達検査
4. 子供の世話をする人
5. 母親を指導する人
6. 地域保健所との連携と事後処置

開始予定：平成5年9月より開始

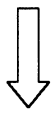
4) Early intervention 実施箇所、予定

- (1) 埼玉小児医療センター：埼玉衛生看護短大 奥平教授が6年間行っている学生サークルの カメノ子グループを利用。

- (2) 松戸市立病院：未熟児センター竹内先生と 聖徳短大保育科、児童科のサークル学生と一緒に松戸市民会館で行う。
- (3) 日赤医療センター：保健相談部で慈恵のグループが協力して行う。
- (4) 女子医大周産期センター：従来から行っている未熟児の親の会（サンショの会）を利用。
- (5) 久留米・聖マリア病院：久留米大小児神経グループ、福祉センターグループを中心に行う。
- (6) 東邦大：未熟児センターと大田区の保健所が行っている親子教室で協力して行う。
- (7) 聖隷浜松：名城大神谷教授が協力して行う。ここは20年以上前に斉藤久子先生が既に超未熟児の就学後問題を指摘している伝統ある所である。
- (8) 自治医大：感覚総合訓練を行っている宮尾先生を中心とするグループで行う。



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



#### 目的

Early intervention は脳障害を治療するものではない。この意味は脳障害を治すものではない。Early intervention の目的は、脳の可塑性を利用して最大限の機能を発揮することと母親の養育態度により本人の持っている能力が十分に発揮されていない時に本人の持っている能力を十分に発揮させ健全な社会生活を送らせることが目的である。